

存在の概念をめぐるカントとクルージウスの対決

繁 田 歩

Kant and Crusius: A Confrontation on the Conception of Existence

Ayumu SHIGETA

Abstract

This study aims to clarify the real intention of Kant's criticism toward the Principle of Crusius concerning existence of objects, i.e. "everything that exist, must exist somewhere and somewhen." Although it is well known that Crusius, one of the main figures among the Anti-Wolffian philosophers of the eighteenth century, had a huge influence on Kant's early thought, some argue that Kant did not understand Crusius properly and that most of his criticisms are not valid due to fundamental misunderstandings. However, if it is also the case concerning "existence," it will be a fatal problem for entire Kantian philosophy because how to conceive the very notion of existence was a key question for Kant and a point of his departure from traditional metaphysics. Hence, instead of extant luddite solutions, we need to examine how and why the principle of Crusius was unacceptable for Kant. As Kant's criticism of Crusius is arguably sparse, we need to provide additional rationales to do justice to his criticism. I will argue that to construe his objection thoroughly we must focus on two main Kantian ideas, namely Kant's refutation of the "fallacy of subreption" and an explanation of space and time as "nothing but a pure intuition." It will be demonstrated that what Kant was dissatisfied with is a problematic method to infer the existence of objects from our subjective representations. Crusian conception of existence, after all, is valid solely on the basis of his principle of inseparability: if p cannot be thought without q , p and q are necessarily connected with each other. This means that once someone thinks an object exists in an arbitrary spatiotemporal location, it must exist objectively in the real world. In this regard, Kant was obviously right to argue against the principle of Crusius concerning existence.

はじめに

本論文の目的は、イマヌエル・カント (1724-1804) の初期の思想に大きな影響を与えたクリスティアン・A・クルージウス (1715-1775) の「現実存在」に関する見解を考察し、それに対するカントの批判の真意を彫琢することである。現実存在の意味と正確な徴表はなにか、という問いは哲学一般にとって根幹的な問いの一つである⁽¹⁾。前批判期の『神の現実存在の唯一可能な証明根拠』(1763)を鑑みるに、この問いにどのように回答するかはカント自身の立場を確立するための重要な論点であった。この問いに対する彼の回答は「存在とは

(1) 本論文であえて考察を控えた論点として「存在」言語に関するメタ存在論的な分析がある。ドイツ語に限っても、Sein、Existenz、Dasein、Es gibtなどの表現があり、それぞれに哲学的な意義が付与されてきた。これらの表現をどのように解釈すべきか、という論点は哲学史上の難問であるといえる。今回はクルージウスの思想に議論を寄せるためにExistenzとDaseinをほとんど同義のものとして取り扱い、Seinを広い意味に用いているが、これらの概念の関係を哲学的に掘り下げることは今後の課題とする。

明らかに実在的述語ではない」という『純粹理性批判』の有名な一文へと収斂することとなる。その過程で、カントは諸哲学者たちの「存在」理解を批判することで彼の意見を醸成したのであるから、カントが他の思想家の「存在」述語の理解を批判した意図を再考することは、彼自身の存在理解の特異性を照らし出すために有用な手続きであるといえる。

本論文では特に、クルージウスの「現実存在」理解に対するカントの批判に光を当てる。というのも、例えばヴォルフ主義者の存在理解とカントのそれは明示的に異なっているが、しかし、クルージウスとカントの現実存在に関する理説は一方では極めて親和的であるようにも見えるが、他方では決定的な点で異なっているという意味で、一層繊細な関係性にあるからである。カントがクルージウスの存在理解から袂を分かち真の理由が特定できれば、批判期に展開されるカントの成熟した存在理解も一層明確となるであろう。

もっとも、カントとクルージウスというテーマ自体はカント研究の古い問題の一つであるが、今日なおこの論点に再注目すべき理由が少なくとも二つある。第一に、カントの「存在」に関する歴史研究においては、主にカントとライプニッツ＝ヴォルフ主義者との対決が注目されてきた。しかし、反ヴォルフ主義者として当時から名をはせていたクルージウスの思想が、カントの「存在」理解にどのように影響を及ぼしているのかを論究する試みは僅かであった⁽²⁾。このことは、当時ヴォルフ主義と拮抗していたトマジウスの潮流を軽視することにつながるため、18世紀の哲学シーンに忠実であろうとする哲学史におけるピリオド奏法的な解釈手法からすると大きな不備であるといえる⁽³⁾。また第二に、カントとクルージウスの関係をめぐる先行研究は、カントの批判に不適切な点を認め、その原因を彼がクルージウスを表層的に理解し、決定的な点で誤解していたことに求めてきた⁽⁴⁾。しかし、この理解は、カントが特段の労力をかけて論じた「現実存在」という論点にむけられた場合には、好ましくない解釈であると言わざるをえない。1763年の『証明根拠』や、同じく60年代の「ヘルダー形而上学講義録」にも確認できるカントの「クルージウスの法則」批判はたしかに分量的にも短く、表現としても遠回しなものであるため、その真意が明確であるとはいえない。しかし、もし我々がこの批判を真剣に捉えるならば、我々解釈者にもとめられるのは、彼の記述をその不分明さゆえに切り捨てるのではなく、むしろカントの記述に適切な訂正を加え、カントがクルージウスの法則の何をどのような理由から批判したのかを明確化することなのではないだろうか。このように〈解釈者の責務〉という観点からみても、カントとクルージウスの関係を再考する余地は依然として残されているのである。

本論文は以下の手順で議論を展開する。第一に、クルージウスという哲学者について簡単に触れたあと、主題となるクルージウスの法則を提示する。第二に、カントがこの法則に対して向けた明確な批判を、いくつかのテキスト証拠から確認する。これらの記述からは、カントの批判の真意が明確ではないことが読み取られるであろう。第三に、我々はカントがクルージウスに対して抱いていた哲学的な不満の核となっていたのは、クルージウスの法則が二重の「窃取の誤謬」を犯していたことにあるという解釈を提示する。カントがクルージウスの法則を否定した理由は、クルージウスの学説を誤解したためではなく、むしろ「窃取の誤謬」を拒絶するという核心的な論点に依拠していることが明らかとなるであろう。

第一節 クルージウスの法則

議論を始めるまえに、クルージウスについて簡単に概説しておきたい。クルージウスの哲学的な意義を述

(2) 例外的に、Rosefeldt (2020) がこのテーマに言及している。もっともカントとクルージウスとの関連に注目する研究は、Marquardt (1885) から Watkins (2009) にいたる歴史がある。立ち入った考察として、Heimsoeth (1956) や Findlay (1981) がカントの思想の根にクルージウス哲学をみとめ研究を残している。また、いわゆる「クルージウス全集」を編纂した Tonelli (1999) による序文は、単なるクルージウスの解説にとどまらず彼の思想をヴォルフ主義と対比し、その特徴を包括的に説明している。

(3) Sgarbi (2016: 6-18) が明らかにしたように、例えば当時のケーニヒスベルクでは、今日でも広く知られているライプニッツやロックのような大哲学者よりも、むしろ独自の進展を遂げたアリストテレス主義に多くの注目が集まっていた。このような当時の現実的な状況を踏まえて哲学的考察を行うことは、まさに Ertl (2013: 429) が表現したように、哲学的な「原音演奏 original sound performance」である。

(4) Cf. 山本 (2010)、石川 (1990)。

べるならば、「反ヴォルフ主義の最も影響力をもった思想家」という一文に集約することができる。クルージウスは、ヴォルフ主義的な形而上学のバックボーンともいえる、第一原理としての「矛盾律」にもとづいて、その他のすべての真理を論証しようとする「論証の方法」に真っ向から対立した⁽⁵⁾。彼は、ヴォルフらとは異なって、矛盾律をそれ自体では空虚なもののみなし、「不可分離律」と「不可結合律」という二つの新たな原理を示し（『論理学』 §7、『形而上学』 §14）、そこから「蓋然性の方法」にもとづいた形而上学の可能性を提唱した⁽⁶⁾。「不可分離律」とは「お互いになしに考えることができないものは事実上相互に結びついている」というもので、「不可結合律」は「相互に共に並列して考えることのできないものは事実上相互に結びついていない」という命題である。カントはクルージウスの主要著作である、『論理学』（1744）、『形而上学』（1745）、『論理学』（1747）を所蔵しており⁽⁷⁾、前批判期のカントがクルージウスに大きな関心を寄せていたことが分かる。若干の例を挙げてこの点を確認しておこう。

カントとクルージウスとの対決は『新解明』（1755）において顕著である。この著作でカントはクルージウスとヴォルフ主義の係争点であった充足理由律に関する論争に掉さすのであるが、そこでクルージウスは以下のようにして紹介されている。

理由律の反対者の第一人者であり、ただ一人で他の全員の代表を優れて務めうる人物は、かの最も明敏なクルージウスである。ドイツの、哲学者とまではいかずとも哲学の奨励者の間では、彼に比肩しうる人物は誰一人としていない（AA. I: 398）⁽⁸⁾。

このように、カントはクルージウスを当時のドイツにおける最上の思想家として認め、彼の見解を踏襲しつつも、それに効果的な批判を加えることで、自身の立場を確実なものとしようと試みていたのである（AA. I: 396-7）。カントは特にクルージウスが矛盾律を唯一の第一原理として認めなかったことを『判明性』（1764）などでも高く評価している（AA. II: 293-4）。そして、本論文の主眼ともなる『証明根拠』（1763）ではヴォルフ、バウムガルテンとならんでクルージウスの「現実存在」理解がやり玉に挙げられている（AA. II: 76-7）⁽⁹⁾。

以上の事実は二つのことを示している。第一に、疑いようなくカントはクルージウスの思想に肯定的な意味で注目していた。しかし、第二に、このようなカントとクルージウスの関係がいわゆる前批判期に限定的であるということもまた事実である。批判期の著作には上のような集中したクルージウスへの言及はなく、むしろクルージウスはこれまでの優れた哲学者のうちの単なる一人として分類されるようになる（Cf. AA. IV: 319, V: 40）。したがって、本論文では、可能な限りクルージウス批判の根拠をカントの前批判期のテキストに求めた

(5) クルージウスは矛盾律とならんで、「不可分離律」と「不可結合律」という新たな原理を形而上学において第一義のものとして提示している。山本（2010: 257）が強調するように、クルージウスはこれらの原理から充足理由律を導出している。また、クルージウスの「根拠」概念にカントが取り組んだ批判的検討の詳細な研究としては石川（1990）がある。

(6) Cf. 手代木（2013: 67-91）。

(7) Cf. Warda（1922: 47）. なお、正式には『論理学』は『理性的に生きるための指針』のことであり、『形而上学』は『偶然的な理性真理と対立するかぎりでの必然的な理性真理の構想』のことであり、『論理学』は『人間の認識の確実性と信頼性への道』のことである。上では初版が刊行された年号をしめしたが、カントが所蔵していたのは第二版であり、『論理学』は1751年のものを、『形而上学』は1753年のものを、『論理学』は1753年のものを有していた。これらの差異は我々の目下の議論に影響しないため簡略化する。クルージウスからの引用については、オーストリア国立図書館とバイエルン州立図書館がデータ化し公開している原典を参照した。なお、原語を引用する際に現代ドイツ語の表記法とずれる場合は原文のままとした。例えば、現代ドイツ語ではabstrahierenとなる語が、原文ではabstrahirenと表記されていた。

(8) 通例に従い、カントからの引用はアカデミー版全集（1900-）を典拠とし、AA. と略記の後、巻数と頁数を（AA. I: 00）のように記載する。

(9) 1763年のもう一つの主要論文である『負量の概念』でも、カントはクルージウスの「観念的根拠」と「実質的根拠」の区分について触れ、それがカントのもの大きく違うことを強調している。もっとも、この点についてカントの批判が十分に成功していたかについては、一定の留保が必要となる。というのも、石川（1990: 28, 42）が指摘したように、カントは表層的なクルージウス理解のもとでいわば翻弄されている箇所もあるからである。とはいえ、石川（1990: 33-35）の言うように、根拠の二区分が「観点」によるものではなく、「原理」によるものであるというカントの気づきこそ、この批判の核心なのである。

うえで、必要最小限の補足として批判期のアイディアに触れることにしたい⁽¹⁰⁾。

(1) クルージウスの法則

それではクルージウスの法則とは何かを確定していこう。一般に「クルージウスの法則」と呼ばれているのは、1762-4年の記録と推定される「ヘルダー形而上学講義録」に確認される次のようなカントの言及と一致する。

この最も抽象的な判断 [第一の根拠となる根本命題ないし根本概念のこと] について人は二重の誤謬を犯してきた。つまり、ヴォルフのように、それすらも証明しようとするか、あるいはクルージウスのように、十分に確定されていないものを根本命題にまで高めるかのいずれかである。前者は無駄な努力をただけでなく、誤った証明することを習慣とし、それに固執した。[...] 逆に後者の場合、人々は信用できないものを信じ込んで、「クルージウスのどこかいつかの法則 Krusius Grundsatz vom Irgendwo und Irgendwann」のような、すべての偽りを受け入れてしまったため、一層みじめな誤謬に陥っている。(AA. XXVIII: 5)

引用にある「どこかいつかの法則」は、後に「すべての存在するものは、どこかいつかに存在する」という一文としても提示される命題と同一である (AA. XXVIII: 9)。

この命題に対応する記述はクルージウスの『形而上学』第四章「物の現実存在とそれに結合した概念について」の§46に認められるため、この箇所を考察していきたい。問題の節は二つの表題のもとに分かれており、前半が「現実存在というもの」の概説であり、後半が「現実存在の定義の証明」にあてられている。まず前半部を引用しよう。

我々がある物を現実存在するものとして表象するばあい、我々の知性 Verstand の本質が我々に、そこからそれについて考え、それを別の物から区別するような本質に加えて、さらにそれが「どこか irgendwo」[あるときに irgend-einmal] あったと考えることを必要とし、それゆえ、事物の形而上学的本質に加えて、それに帰属すべき場所 *ubi* と時 *quando* を加えて考えることを必要とする。したがって、現実存在 Existenz とは、そのおかげで思考の外側の「どこか」「ある時点」に見出されることができるよう、事物の述語である。我々が「ある実体が現実存在する」というとき、我々はそれを直接に特定のどこか、ないし空間におい、そして、時間上のいつか発見したということを主張している。[...] (『形而上学』 §46)

引用にある「形而上学的本質」とは、§17と§19の箇所で説明されるように、対象の「現実存在」や「単なる名称」とは対置される、ある事物を他の事物から根本的に区別するような性質のことである。形而上学的本質は当の対象の現実存在とは無関係に考察することができるが、もし我々が「ある事物が現実存在する」と述べようとするならば、思考においてその事物の本質的な性質の連言を構成するだけではなく、それが思考の「外側」つまり空間と時間のうちにも見出されるということを主張しなければならないのである。

さて、§46の後半の箇所を引用しよう。

これが現実存在の真なる概念であるということは容易に理解されうるであろう。人は現実存在するものを、単に考えられたものや、それに等しいものと対置する。人は事物の現実的な現存在 *wirkliches Daseyn*

⁽¹⁰⁾ この「補足」は1770年の就任論文を起点として見出されることになる。70年論文は形式的に言えば前批判期の著作であるが、実質的には批判期の思想に密接に関連しているため、単純に前批判期の思想として取り扱うわけにもいかないという特異な立ち位置にある。したがって、本来であれば前批判期5~60年代、過渡期70年代、そして批判期80年代の思想を区分したうえで、接続点を精密に論証することが必要と思われる。しかし、本論文では若干のリスクを承知の上で、この70年論文の過渡期的な側面を積極的に活用し、60年代のクルージウス批判に見られるカント批判哲学の萌芽を逆照射していきたい。

を、単なる思考における存在 *blosses Seyn in den Gedanken* から区別する。後に詳述するように、単なる思考における存在が可能性をかたちづくる。ここから若干の人は、現実存在とは可能性の補完物 *complementum possibilitatis* であると述べる。しかし、これは可能性以上のものが必要となったときに、現実存在があればそれが補完物としての役割を果たすことができるだろう、ということ以上のことをいっていない。このことは正しいが、しかし依然として分析されていないままである。もし我々がここで、可能的なものが現実存在する場合に、それに付け加わるところの積極的なものに注意を向ければ、我々は思考以外には「場」と「時」ということが肯定されるということしか考えられないであろう。我々がそれを実際に定立するようなしかたでこれらを可能性に付加をするやいなや、我々はそれを現実存在するものとして考えているのである。したがって現実存在は考えられた事物がどこかに、いつかの時にあるということなのである。(『形而上学』 §46)

クルージウスはここで、「現実存在とは可能性の補完物である」というヴォルフの「現実存在」理解に対抗して、その補完物は単に消極的に付け加わる（あるいは神が付け加える）ものではなく、むしろ「時と場所」という積極的な徴表が肯定されることだと述べる。最後の一文に示されるように、クルージウスにとって「現実存在とは事物がどこかいつかに存在する」ということなのであり、逆に言えば、空間と時間という性質こそが対象が現実存在することの本質的な徴表なのである⁽¹¹⁾。

しかし、上の「現実存在の定義」にはある循環が生じているように思われるかもしれない。つまり「現実存在とは、時間と空間においてあることだ」と述べた場合、表面的には「存在することは～において存在することだ」と言っているようにみえるからである。クルージウスはこの批判に §47 で対処している。彼は、「内在 *in esse*」と「現実存在 *existere*」を区別し、前者を広義の「存在 *Sein*」にあて、後者を狭義の「現実存在 *Dasein*」に限定して用いる。したがって、我々にとってユニコーンは「知性内在 *in esse intellectui*」であるが、狭義の現実存在、より正確には「どこかいつか存在 *alicubi et alicuando esse*」は見いだされないのである。したがって、存在しない可能的な対象を含む広義の対象のうち⁽¹²⁾、現実存在する対象の徴表となるのが「どこかいつか存在」なのである。現実存在の定義を正確に言い直せば、「現実存在」とは広義の存在のうちで、「どこかいつか」に支えられた狭義の存在のことであるといえる。したがって、この定義には循環はないのである。

(2) 現実存在の抽象物としての時間・空間

しかし、クルージウスは現実存在の定義において「空間と時間」とはなにかを説明していない。むしろ彼は、現実存在の定義に時間と空間が不可欠な要素であることをまずもって言い立てたのちに、それについて §48 以下で解説をしていく。§48 では空間と時間は現実存在の概念の二つの「公理」であるといわれる。

現実存在の概念から生じる二つの主要公理とは「すべて存在するものはどこかにあり、なんらかの空間において間接的にか直接的にか発見されねばならない」というものと、それに加えて「すべて存在するものはいつかあったのであり、なんらかの時間に存在するのである」というものである。(『形而上学』 §48)

二つの公理はそれぞれ「どこかいつかの法則」を空間と時間に適用したものだが、この節を見る限り空間と時間がクルージウスにとって何を意味するかは釈然としない。

決定的な回答として、クルージウスは §51 で「空間は実体でも付随的性質でもなく、むしろ現実存在の抽象物 *Abstractum der Existenz* である」と述べる。同様の説明は空間と時間とに共通するので、以下の議論では

(11) ここで当然の疑念として、神は「どこに」存在するのか、という問いが立てられるかもしれない (cf. AA. II: 414-415)。この点について、クルージウスの『形而上学』 §51 を見る限り、神が存在する場合は、感性的事物が「延長」として存在するような物体的な空間ではなく、非感性的な「場」であるといえる。本論文ではこのような消極的な説明に議論をとどめておきたい。

(12) 『形而上学』 §11 において、クルージウスは「事物一般」の概念にふれ、事物という語は広い意味では現実には存在しない可能的対象をも含むということを認めている。

空間の概念だけに論点を絞ることとする⁽¹³⁾。

まず、我々は次のように考えることができる。つまり、空間というものが単なる関係ではなく何か別のものであるべきならば、それは実体であるか、あるいは付随的性質であるかのいずれかであると。だが、我々自身はこのように言うことはない。私の答えは、これら二つの選択肢のほかにもさらに第三の選択肢が存在し、そこに向けて我々のこれまでの証明は行われてきたのである、というものである。主体と付随的性質は事物の形而上学的な本質から抽象されたのであり、この形而上学的本質というものは現実存在と対置されている。したがって、空間というものはまさに現実存在の抽象物でありえ、実際にもそうなのである。(『形而上学』 § 51)

一般にこの箇所は、クルージウスによるライプニッツ＝ヴォルフ主義ならびにニュートン主義への批判として知られている。つまり、クルージウスにとって空間（ならびに時間）というものは、ライプニッツ＝ヴォルフ主義のように、複数の単純実体の関係によってはじめて見いだされるような副次的な表象ではなく、あるいはニュートンのような空虚な絶対空間でもないのである。むしろ、彼にとって空間は現実存在の概念から「抽象」された抽象物であって、逆に言えば、空間性が可能的対象を現実的対象から区分する徴表となるのである。したがって、「現実的な空間というものは、お互いに区別された現実的な被造物によって満たされたもの、という以上のことを意味しない」ことになるのである。空間の観念は現実存在からの抽象物であり、現実的空間とは現実に存在する対象（ないし被造物）によって満たされた「場 Ort」のことを意味するのである。

ここで「抽象 Abstraction」あるいは「抽象物 Abstractum」について説明を加える必要がある⁽¹⁴⁾。本論文では、この説明を『形而上学』の内部ではなくむしろ『論理学』の記述に求めてみよう。第一に注目すべきは、「抽象」という事柄が説明されている『論理学』第二章「人間知性の諸力について」の § 93 以降である⁽¹⁵⁾。クルージウスは人間知性の力（ないし能力）として、§ 64 「感覚力 Empfindungskraft」、§ 88 「思考 Gedächtniß」、§ 93 「判断力 Urtheilungskraft」、§ 98 「天性の才 Ingenium, Witz」の四種を挙げているが、第三の能力である判断力がまさに「抽象 Abstraction」の能力と同定されることとなる⁽¹⁶⁾。クルージウスにとって、判断力というものは、例えば概念や感覚のような知性のうちにある表象を、相互に一致させたり区別させたりする働きである。

この働きは抽象と呼ばれる。というのも、抽象するということは、ある概念をそれが包摂されていた、あるいはそれが結合していた別の概念から、思考のうちで切り離し absondern、即自的に考察することだからである。したがって、判断 Judicium は抽象する力 Kraft zu abstrahiren なのである。(『論理学』 § 93)

引用の最後の行に明らかなように、抽象とは判断することであり、その内実としては、ある複合的な概念の分析とその分析結果への注目が意味されていた。後続する § 96 でも、クルージウスは「判断の本来の働きは抽象するということにある § 93」と述べており、判断と抽象の同一視は『論理学』で一貫している⁽¹⁷⁾。「抽象

(13) 時間については『形而上学』の § 54-55 を参照のこと。

(14) Heimsoeth (1953: 179-80) では、時間と空間が抽象物である理由は、それが実体などの単純概念とはことなって「不完全な事物」、つまり、他の事物に不可分に結びついており、その他の物なしにはありえないような概念であるからだと説明している。このことは『形而上学』 § 18 の記述にも一致しており、疑いようなく重要な論点である。しかし、本論文ではこの論点に付け加える形で、『論理学』における抽象の意味に問題解決の糸口を求める。

(15) 本論文はカントの悟性と分けるためクルージウスの Verstand に「知性」をあてている。

(16) 本論文では判断力と抽象という概念の関係について視野を制限して考察を進めるが、カントとの比較という点で言えば次の二点も興味深い。第一に、クルージウスは知性の能力として「感覚」を挙げている点でカントと大きく異なっている。もっとも、クルージウスのいう「内的感覚」とは、まさに「意識」のことであり、カントにおいても生じる「統覚」と「内官」を通じた感性と悟性の接近がこの点で想起される。第二に、「天性の才」という概念も当時のヨーロッパの思想家がそれぞれに言及していた重要な論点であり、この点でもカントとクルージウスとの比較は興味深い発見をもたらす可能性が高い。これらの考察は、本論文の骨子にかかわるものではないために、別の機会に検討することとした。

Abstraction]とは判断を通じて共通点や差異を特筆することであり、「抽象物 Abstractum]とはこの抽象の帰結として生じる分析された概念である。「現実存在の抽象物]とは、したがって、現実存在を主語とした判断における述語位置にくる概念のことであり、「空間と時間が現実存在の抽象物である」という主張は「現実存在とは空間にあること時間にあることである」という判断へと還元できる。

以上の考察から、我々は「クルージウスの法則」を可能な限りクルージウスの主張に沿う形で切り出した。この法則は、単なる可能的対象から現実の対象を区分する徴表であり、対象が現実存在するという事は、それが時空間的な「場」を占めるという点に本質を持つのであった。「現実存在」と空間と時間は分かちがたく結びついており、空間と時間は「現実存在の抽象物]であると言われた。このことは、空間と時間というものは形而上学的に現実存在と切り離すことのできない「不完全な事物」であること、ならびに「ある対象が現実存在に存在することは、それが時間的・空間的にあることである」という判断（抽象）は論理的に必然的に真であるという主張なのであった。このことは「不可分離律」によって確実であり、「あるものを現実存在するものとして考え、かつどこにもないと考えるということは不可能である」という§50の説明によって、なんら捏造ではないことが示されるのである。

第二節 カントによる批判

それでは、カントによるクルージウスの法則への言及を確認していこう。本節を通じて我々は、カントはたしかにこの法則を批判しているが、その批判の核心的な論拠がなんであるかは曖昧であることを看取するであろう。クルージウスの法則への言及として広く知られているのは『証明根拠』（1763）の一文である。

あの有名なクルージウスは、「どこかで」と「いつか」を存在の絶対確実な規定と考えている。しかし、現に存在するものが「どこかで」と「いつか」という規定性を持たなければならないという命題の検討には立ち入らないことにしても、これらの述語は可能的事物にも帰属しうる。たとえ現実に存在しない可能的な人間でも、全知全能の神は、もしその人間が存在するとすれば備えうるであろうすべての規定を知っているはずである。したがって、そういった可能的人間も一定の場所で、一定の時に存在しうるのである。永遠にさまよえるかのユダヤ人アハスエルスは、あらゆる土地をさまよひ、あらゆる時間に生き続けた後もなおれっきとした可能的人間なのである。しかし、「どこかで」と「いつか」という規定は事物が現にそこにあり、そのときにあるならば、存在の十分な証拠となるなどと、なおも言い張らないでほしい。なぜならば、そういった主張には、我々が有効な証拠を持ち出しながら一所懸命に証明しようと努めているところの論点が先取りされてしまうことになるのだから。(AA. 2: 76-77.)

一見すると引用におけるカントの批判は明確である。つまり、カントは、クルージウスとは異なり「さまよえるユダヤ人」のような伝説あるいは物語の登場人物である虚構的对象には、時空間的な特徴づけが可能であるのにも関わらず、その特徴づけはその対象の現実存在を帰結しないということに気付いているのである⁽¹⁷⁾。たしかにクルージウスはこのような反例モデルを検討しておらず、したがってこの点についてはカントのクルージウス批判は妥当するようと思われる。カントの言うように、なんであれ現実存在する対象ならば、それはどこかいつかに存在したという判断は妥当であるが、しかしその逆は成り立たない。したがって、現実存在と時間と空間との結合は一方的であり正しい定義ではないのだ。

しかし、カントの批判は他の点ではあまり明らかではない。というのも、カントは「現に存在するものが「ど

(17) なお、クルージウスは抽象の場合分け (cf. § 96-7)、ならびに抽象の仕方 (cf. § 121-128) を分類しているが、今回はクルージウスのいう抽象の根本的意味を理解するのみにとどめ、すべての項目を取り上げることは避ける。

(18) 哲学的にいえば、この種の非存在対象はかなり多義的であるためにさらなる検討を要する。例えば、著者が確定している物語における登場人物、情報ソースが明らかではなくなった伝説・都市伝説・神話などにおける登場人物、歴史的事実であるがそれをもとにして制作されたフィクション、物語の登場人物が語りだした物語における登場人物、などはそれぞれ別個の問題として考えるべきである。この点について、古典的ではあるが、示唆深い研究として Parsons (1980: 49-60, 175-211) がある。

こかで」と「いつか」という規定性を持たなければならないという命題の検討には立ち入らず、それでいてクルージウスの主張を「我々が有効な証拠を持ち出しながら一所懸命に証明しようとするところの論点」が先取りされてしまうことになる」として非難しているのである。ここでカントが懸命に取り組んでいる論点とは、現存在とは述語でも規定でもなく、むしろ「絶対的定立」であるという主張である。このことをカントは慎重に説明しようとしているのに対して、クルージウスの法則は論点先取を犯していると言われる。しかし、何がどのような理由で論点先取であるかは明確でない。

第二の「クルージウスの法則」批判は、1762～4年のものと推定される「ヘルダー形而上学講義録」に確認される。この講義の冒頭でカントは、形而上学の第一根本命題をめぐるこれまでの探求は、ヴォルフ主義にあっては不要な証明をおこない、クルージウスにあっては不確実な命題を受け入れるという誤謬に陥ってきたと診断している (AA. XXVIII: 5)。カントはクルージウス哲学における不確実な命題として「どこかいつかの法則」をあげており、したがって、この命題がカントには満足のかないものであったことだけは明らかである。

しかし、カントはこの講義録でクルージウスの法則の問題点を明示していない。この講義のかなり初期の段階でカントは「形式的原理 *principium formale*」と「実質的原理 *principium materiale*」の区別を提示している (AA. XXVIII: 8)。前者は矛盾律と同一律のように、主語の「すべての述語」に関する関係を考察するために役立つ原理であり、後者は主語が「どの述語について」関係すべきかを示す原理である。カントはクルージウスの功績として「実質的原理」を重視したことを高く評価している。しかし、この実質的原理の一つとして取り上げられているものこそ「クルージウスの法則」であり、したがって、まさにこの原理が諸刃の剣であるとカントは考えていたようである。

誤謬：もしそのような命題「証明しえない実質的原理」が真であるならば、その場合それは論理的原理ではない。というのも、命題がいかなる別の根拠からも証明できないならば、「私が真であるとしか考えられないことは真である。つまり、私はそれを真とみなさなければならないのである」などなどと述べているだけであって、何も証明されていないからである。ちょうど同じことが不可結合律と不可分離律についても生じている。これは適用された同一律以外の何物でもないのである。すなわち、私が分離しているとしか考えられないものは分離しており、私が結合しているとしか考えられないものは結合している、というのである。(AA. XXVIII: 10)

ここでカントはクルージウスの二つの重要な実質的原理である不可結合律と不可分離律の定義を挙げ、それが論理的原理ではないことを指摘している。カントが批判の論拠としているのは、これらの命題は「適用された同一律」にすぎないという点である。「適用」とは、この同一律が「私が～としてしか考えられない *ich nicht anders als ~ denken kann*」という制約のもとにあることを意味している。つまり、ある主体にとって真であるとしか考えられないことは、当人にとって真である、という同一律がここで批判されているのである。

しかし、この批判が成功しているかについては検討の余地がある。確かに、実質的原理が同一律によって証明可能な場合、それはもはや実質的原理から外れてしまうため問題含みである。実際に、カントは実質的原理が「隠された同一性によって証明される」と述べている (AA. XXVIII: 9)。しかし、この講義でカント自身がクルージウス哲学の長所としていた、「同一律によっても矛盾律によっても証明できないが、それでもなお許容されるような、数多くの証明しえない命題が存在する」というクルージウスの発見に留意するならば、クルージウスの原理が「論理的原理ではない」(AA. XXVIII: 10) ことは自明である。むしろ、実質的原理が空虚な論理的原理ではないことこそがクルージウス哲学の核心的なアイデアなのであって、この点をカントが指摘したところでクルージウス哲学に対する決定的な反駁とはなりえないのである。

以上のように、「クルージウスの法則」に対するカントの批判は文面から見る限り、それが不確実で、非論理的で、論点先取であることを批判の論拠としているようだが、この批判が正当なものであり、成功しているとは言い難いのである。このような事実からすると、カントはクルージウス哲学を「表層的」に理解しているか「誤解」しており、なんらかの「屈折」をもってクルージウスの主張を否定していた、という先行研究の結

論がもっともらしく思えてくる。筆者としては、しかし、カントの批判は確かに言葉足らずであるが、若干の論点を補うことによって成功した批判に高めることができている。本論文冒頭で述べたように、現実存在という論点については、カントのクルージウス批判に誤解を認め、議論全体の価値を値下げするようなことは可能な限り避けるべきなのである。

第三節 批判の核心

カントの不明瞭なクルージウス批判を再構成するために、本節をつうじてクルージウスの法則が何をどのように「論点先取」しており、どの点で「信用できないものを信じ込んで […] すべての偽りを受け入れ」ているのかを明らかにしていく。まず、クルージウスの議論が人間の「知性の制約」を前提としていることをおさえておこう（『形而上学』 § 14）。カントと同様に、クルージウスの理解によれば人間は例えば神の視点から可能性を総覧することはできず、可能性や現実性は常に制限づけられているのである。したがって、「A と B は不可分であるとしか考えられない」と判断する主体は、構造的に主観的な観点から判断しており、主体がもつ「感覚」をこの判断の確実性の徴表としている。これはクルージウスの「蓋然性の方法」の現れであるが、カントはまさにこの点に困難を見出していたのである。

とりわけ重要なのは、カントにとって「単なる主観的必然性を習慣から、あるいは対象をそれとは別の仕方では理解できないという無能力から、客観的必然性であると考えてしまう」（AA. XI: 41）ことは「窃取の誤謬」以外のなにもものでもないという事実である⁽¹⁹⁾。「窃取」とは一般に、種的に異なる二項、例えば、「主観的と客観的」や「感性的と悟性的」という対立軸を混同し、それらを「雑種の *hybridum*」に接続してしまう誤謬のことである⁽²⁰⁾。実際に、カントは 1770 年の教授就任論文『形式と原理』ですでに「すべての存在するものは、どこかいつか存在する *quicquid est, est alicubi et aliquando*」という命題を「第一部類の窃取の公理」として挙げている（AA. II: 413-4）。この箇所ではクルージウスが名指しされることはないが、しかし、本論文第一節の考察からすれば、これが同一の命題を指示していることは明白である。つまり、70 年になると、カントのクルージウス批判は「窃取の誤謬 *vitium subreptionis*」への批判という形で展開されることとなるのである（AA. II: 412）。クルージウスの法則が窃取の誤謬とみなされる理由は少なくとも三つの段階を追って説明される必要があるため、70 年論文においてクルージウスの法則が「窃取」であると言われる直接的な理由については本節の最後に説明することとして、以下ではクルージウスの法則に理論的に想定される窃取の誤謬を分析していこう。

第一に、クルージウスの法則の根拠である「不可分離律」にみられる窃取を確認する。クルージウスは確かに、人間の知性一般の本性として不可分離律を主張したが、しかし、それは常に反対の証明の可能性を残すため、真の必然性に至ることはありえず、高められた蓋然性に過ぎないのであった⁽²¹⁾。したがって、クルージウスが独自のものとして提示した二つの実質的原理は、主観的に私の知性のうちで A としか考えられないことは、客観的に現実の外界においても必ず A である、というゆがめられた同語反復になっているのである。つまり、カントの批判はクルージウスの実質的原理が同一律によって証明できることに向けられているのでも、証明不可能であることに向けられているのでもなく、むしろ客観的には現実性に過ぎないはずの主観的必然性を真の客観的な必然性と取り違えるという蓋然性の方法による哲学の構想それ自体に向けられているのである。この点をふまえれば、彼の思想が「信用できないものを信じ込んで […] ヴォルフ主義の論証的方法よりも […] 一層みじめな誤謬に陥っている」と言われた理由も理解することができる。

第二に、「クルージウスの法則」にみられる窃取を確認しよう。この法則も不可分離律から導かれているの

(19) 上の一文はカントのエーベルハルト論争に関連する 1789 年 5 月 19 日のラインホルト宛書簡の一部である。

(20) カントにおいて「窃取」ということには 70 年論文のような形而上学的窃取のほか、批判期の超越論的窃取という意味もある。この点についての考究としては城戸（2000: 210-219）が参考となる。

(21) 「蓋然性」概念をめぐるクルージウスとカントの関係性に関する最良の歴史研究として船木（2002、2020）がある。また、「蓋然性の方法」に基づいたクルージウス形而上学を、とくにデザイン論証の観点で示した研究としては手代木（2013: 67-91）がある。

だから、蓋然性を必然性と取り違える誤謬を指摘することができる。これはクルージウスの形而上学が内包する綻びの点であるとすらいえよう。不可分離律からこの法則を導くということはつまり、時間と空間において存在するものは、比較的高い蓋然性をもって現実に存在するとしか言えないことを意味している。しかし、ここで蓋然性を必然性と取り違えた場合、主観的必然性（現実性）はそれ自体で確実に他の根拠を必要とせず客観的必然性とみなされ、対象について言えば、偶然的なものは同時に必然的に、内的なものは同時に外的に存在するという不合理を犯すことになる²²⁾。カントが例に挙げている「さまよえるユダヤ人アハスエルス」という虚構対象の例は看過しえない不合理をもたらすことになる。

まず、「不死」でありかつ「人間」である対象として指示されるアハスエルスは、論理的には無矛盾であるため「思惟存在 *ens rationis*」の一種である。つまり、アハスエルスは「知性内在」する広義の対象には含まれてよいのである。問題は、この対象に「クルージウスの法則」を適応した場合である。「実際に、アハスエルスに会ったことがある」と証言した司祭の逸話などを考えれば、若干の主体にとってアハスエルスは知性内在を超えた、「どこかいつか存在」を持つ「としか考えられない」ということになる。ここでクルージウスの法則がもし正しければ、知性内在を超えて「どこかいつか存在」をもつすべての対象は実際に、つまり外界に現実存在するはずである。すると、ある主体がそうであるとしか考えられない、というだけでアハスエルスの客観的実在が導出されることになる。しかし、これは不合理である。したがって、少なくとも形而上学的な原理としてクルージウスの法則には不備があるのだ。

だが、カントが批判していたのはクルージウスの現実存在理解が「論点先取」になるということであった。「論点先取」は複数の形をとりうるが、カントが「一所懸命に証明しようと努めている」論点つまり、絶対的定立としての現存在に関する論点先取を検討してみよう。第一に、『証明根拠』でのカントの行論は、存在述語の用法を二つの定立に分け、さらに絶対的定立が現存在の真意であると同定するものである。これに対して、クルージウスは不可分離律をもとに、現実存在と時間と空間が不可分であることを主張している。つまり、カントは可能的事物から現実的事物への移行の契機として絶対的定立としての現実存在の意義を見定めようとし²³⁾、あえて遠回りな議論を構築しているのに対して、クルージウスはすでに現実的事物を前提して事物の現実存在にとって時間と空間とが不可欠であると論じているのである。その場合、クルージウスの説明は「もし何かが存在するならば、それは時空的に現実存在する」と言っているにすぎず、現実存在の説明としては明らかに論点先取である。

最後に、我々にはもう一つ解かねばならない疑問がある。つまり、なぜカントが「現に存在するものが「どこかで」と「いつか」という規定性を持たなければならない」という命題の検討には立ち入らない」ことにしたかである。このことを説明するために、カントとクルージウスの見解は以下の点では符号することになることを確認しよう。クルージウスは『形而上学』§46で次のように述べていた。

もし我々がある実体は現実存在するという場合、我々はそれを直接に空間上のどこかで、時間上のいつか見たということを主張する。

他方で、カントは次のような記述を残している。

例えば、海の一角獣には現存在が属するが、陸の一角獣には属さない。[...] このような事物の現存在にまつわる命題を論じる場合、主語概念のうちを探してもムダであり [...] むしろ私が事物について有する認識の源泉を探るのである。私は、「それを見た」とか「それを見たという人々から聞いた」などと言わ

²²⁾ Cf. AA. I: 396-7.

²³⁾ もっとも、『証明根拠』における定立論は、何であれ可能的事物は「神の知性の表象のうち」に存在し (AA. II: 74)、これが定立されることで、いわば現実世界が創造されるという古典的な見解を下敷きにしていた。この点で、『純粹理性批判』における存在に関するカントのテーゼとは一線を画している。

れるのをよく聞く。(AA. II: 73)

つまり、カントもクルージウスと同様に、「どこかいつか存在」を対象の現実存在の試金石として認めているのである。この事実が示しているのは、カントは一方でクルージウスの現実存在の説明が定義として不十分であり、論証方法としても論点先取になっている点で批判しつつ、結局のところ現実存在するものが時空的に存在するという事実を否定できず、したがって、この点については考察を控えざるを得なかったということである。筆者は、ここでカントは単に消極的な撤退をしているのではなく、むしろクルージウスに対して積極的に立ち向かうために、あえて議論を中断しているのだと解釈している。

ここで注目すべきは、現実存在の概念と時間と空間との関係性である。クルージウスとカントは時間と空間の理解において、決定的に立場を異にしているのである。第一節に見たように、クルージウスにとって空間と時間は「現実存在の抽象物」であった。時間と空間は単なる関係でも実体でも属性でもなく、むしろ現実存在する事物に関する判断において不可分な「不完全な事物」である。単純に言えば、現実存在する事物があつて初めてその特質として空間と時間が判断において分離され考察されるのである。この意味で空間と時間は現実存在の抽象物なのであった。すでに見たが、抽象とはクルージウスにおいては判断という知性の能力のことであつて、つまり、時間と空間は知性によって現実存在という概念を分析した場合に不可分に見出されるような観念なのである。

これに対して、カントは空間と時間についてどのように考えていたのであろうか。空間と時間を感性の純粋な形式であるとする批判期の成熟した感性論に対して、前批判期のカントは空間と時間についてあまり確定的な主張をなさなかった²⁴。前批判期のカントが時間と空間について集中的に論じているのはカントの教授就任論文『形式と原理』(1770)である。カントはこの論文で、例えば時間について、時間は感覚から抽象される類のものではなく、むしろ前提すべきものであり、直観であり、そして客観的実在ではないと述べている。時間とは客観的実在ではなく、「実体でも偶有性でも関係でもなく、むしろ人間の精神の本性によって必然的な[……]主観的条件であり、純粹直観 *intuitus purus*」である (AA. II: 400)。この記述をただちに『純粹理性批判』の感性論と同一の意味とすることはできないかもしれない。しかし、カントが時間や空間を特徴づける際に、それが感性に独自の「純粹直観」であるということをも 1770 年の時点で強調していたという事実は注目に値する。というのも、クルージウスは「空間は実体でも付随的性質でもなく、むしろ現存在の抽象物」である、つまり現実存在という観念から判断を通じて知性によって到達可能な観念であるとしたのに対して、カントは空間と時間を「純粹な直観」として確定しているという事実、彼らの空間と時間に関する見解の明らかな相違を看取することができるからである。

我々はクルージウスの空間と時間の見解、そしてそれがクルージウスの法則の根幹にあるという事実を「窃取の誤謬」として理解することができる。というのも、カントにとって窃取の誤謬とは「感性的概念を悟性的徴表であるかのように偽装すること」であるが (AA. II: 412)、このことは時間と空間を知性的な抽象物とみなしたクルージウスの思想に当てはまり、この点から実際にカントはクルージウスの法則を窃取の誤謬の一例としているからである。つまり、カントが 70 年時点で到達していた、「感性的認識に固有の原理がその限界を超えて悟性的なものを触発しないように細心の注意をはかるべきだ」(AA. II: 411) という感性と悟性を種的に峻別する思想、そして空間と時間は感性に固有の純粹直観であるという思想は、クルージウスの法則をカントが受け入れなかったことを説明するための積極的な根拠となるのである。

以上のように、『証明根拠』1763 年の時点で、クルージウスの法則についてカントが残していた検討の余地は、1770 年の『形式と原理』における時間と空間に関する議論ならびに窃取の誤謬批判という文脈を通じて、事柄として回収されていると解釈できる。60 年代にカントが残した言葉足らずなクルージウス批判の真の論拠は、第一に、クルージウスは主観的に必然的なことを客観的必然性へと取り違えていることであり、第二に、

²⁴ Cf. AA. II: 71. 「おそらくまだ誰も空間の本質を正しく説明したものはなかろう。しかし、空間は三つ以上の次元を持ちえない等のことは確言できる」。

クルージウスは純粹直観としての「空間と時間」という感性的なものを悟性的な原理へと組み入れていたことなのであった。そのどちらもが「窃取の誤謬」と呼ばれるものであり、これらの発見は批判期のカント哲学にとって根幹的な気づきなのであった。

おわりに

本研究の目標はカントによる「クルージウスの法則」批判の真意を確定することであった。カントによるクルージウス批判は曖昧なものが多く、この点から先行研究ではクルージウスのカントへ与えた影響は大きい、それは何らかの誤解によるものであるとみなす議論もあった。しかし、本論文で示したように、たしかに「現実存在」に関するカントのクルージウス批判は説明不足ではあったが、無理のない修正を加えれば成功した批判として解釈しうるものであった。第一節に見たように、「存在するものはすべて、どこかいつかに存在する」というクルージウスの法則は、空間と時間は「現実存在の抽象物」である、つまり、時間と空間は「現実存在」概念を判断によって分析することで到達できる観念であるという見解に依拠していた。第二節では、『証明根拠』とヘルダー形而上学講義録における「クルージウスの法則」に対するカントの批判の記述は早急であり、先行研究のようにこの論点についてカントはクルージウスを誤解しており、批判としては成立していないのではないか、という疑いの余地があることを確認した。しかし、もしこの疑念が正しいならば、我々はカント哲学を根本的に特徴づけると考えられてきた「現実存在」の理解について、何らかの不安定な出自を認めなければならなくなるため、既存の解釈路線は問題含みなのであった。

筆者は問題解決のため第三節で、カントによるクルージウス批判における核心的論点を二つの「窃取の誤謬」に見定めた。つまり、カントが批判していたのは、クルージウスの法則は主観的必然性を客観的必然性に取り違えていること、そして「時間と空間」という感性的なものを悟性的原理の基礎と取り違えていることの二点にあったのである。

第一に、クルージウスの法則は、「不可分離律」つまり、「お互いになしに考えることができないものは事実上相互に結びついている」という実質的原理に依拠していた。しかし、この命題は本質的に認識主体にとっての确实性の度合いの高さ、つまり「蓋然性」以上のことを示すことができないはずであった。したがって、クルージウスの法則は、本来は蓋然性にすぎない主観的必然性を客観的必然性へと取り違えるという誤謬を犯していたのであった。

第二に、カントは空間と時間に関するクルージウスの見解にも「窃取の誤謬」を見ていた。たしかに、彼らは時間と空間が実体でも関係でも、物の性質でもない主張する点で共通しているが、しかし、一方でクルージウスが時間と空間を「現実存在」から抽象された観念とし、他方でカントはこれらを感性に固有な「純粹直観」として見做していた。つまり、感性的なものを悟性的なものとして取り違えるという窃取の誤謬がクルージウスの法則に潜んでいることが、70年論文におけるカントによるクルージウス批判の核心であった。

これまでの議論を通じて、前批判期のカントが「現実存在」についてクルージウスと対決することで、批判期にまで連続する主要テーゼを醸成していたことが理解できたであろう。我々がカントによるクルージウス批判の真意を正確に解する限り、カントはクルージウスについて誤解していたと考える必要はないのである。本論文のように解釈されたクルージウスの法則批判をもとに、カントの「現実存在」概念のさらに詳細な意味を検討することが筆者の今後の課題である²⁵⁾。

参考文献

- Crusius, Christian A. (1744): *Anweisung vernünftig zu leben, darinnen nach Erklärung der Nature des menschlichen Willens die natürlichen Pflichten und allgemeinen Klugheitslehren im richtigen Zusammenhange vorgetragen werden*, Leipzig: Johann Friedrich Gleditsch. (Retrieved from https://www.google.co.jp/books/edition/M_Christian_August_Crusii_Anweisung_vern/L1laAAAAcAAJ?hl=ja&gbpv=0)
- Crusius, Christian A. (1745): *Entwurf der nothwendigen Vernunft=Wahrheiten, wiefern sie den zufälligen entgegen gesetzt werden*, Leipzig: Johann Friedrich Gleditsch. (Retrieved from <https://books.google.fr/books?id=-sRaAAAAcAAJ&hl=ja>)

25) 本論文は JSPS 科研費 (20J11554 (「カント「対象」論の分析哲学的手法による研究)) の成果の一部である。

- Crusius, Christian A. (1747): *Weg zur Gewissheit und Zuverlässigkeit der menschlichen Erkenntnis*, Leipzig: Johann Friedrich Gleditsch. (Retrieved from https://www.google.co.jp/books/edition/Christian_August_Crusii_Weg_zur_Gewi%C3%9Fhe/bsEAAAAAcAAJ?hl=ja&gbpv=0)
- Ertl, Wolfgang (2013): “‘Nothing but representations’ — A Suarezian Way out of the Mind?” In: S. Bacin, A. Ferrarin, C. La Rocca, M. Ruffing (eds.), *Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht: Akten des XI. Internationaler Kant Kongress Pisa 2010*, Berlin: De Gruyter, vol. 5, pp. 429-440. (増山浩人 (訳) (2018) : 「「表象にほかならないということ」——心の外へ向かうためのストア的方法?——」、『カントという衝撃 思想 No. 1133』、岩波書店。)
- Findlay, John N. (1981): *Kant and the Transcendental Object: A Hermeneutic Study*, Oxford: Clarendon Press.
- Funaki, Shuku (2002): *Kants Unterscheidung zwischen Scheinbarkeit und Wahrscheinlichkeit: Ihre historischen Vorlangen und ihre allmähliche Entwicklung*, Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Heimsoeth, Heinz (1956): “Metaphysik und Kritik bei Chr. A. Crusius: Ein Beitrag zur ontologischen Vorgeschichte der Kritik der reinen Vernunft im 18. Jahrhundert,” In: *Studien zur Philosophie Immanuel Kants: Metaphysische Ursprünge und ontologische Grundlagen*, Köln: Kölner Universitäts Verlag, pp. 125-188.
- Marquardt, Anton (1885): *Kant und Crusius: Ein Beitrag zum richtigen Verständniss der crusianischen Philosophie*, Kiel: Lipsius & Tischer.
- Sgarbi, Marco (2016): *Kant and Aristotle: Epistemology, Logic, and Method*, Albany: Suny Press.
- Tonelli, Giorgio (1999): “Vorwort”, In: *Christian August Crusius: Die philosophischen Hauptwerke*, Heidesheim: Georg Olms, vol. 1, pp. VII-LXV.
- Watkins, Eric (2009): “Christian August Crusius”, In: *Kant’s Critique of Pure Reason: Background Source Materials*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 132-135.
- Warda, Arthur (1922): *Immanuel Kants Bücher*, Berlin: Martin Breslauer.
- Parsons, Terence (1980): *Nonexistent Objects*, New Haven: Yale University Press.
- Rosefeldt, Tobias (2020): “Kant’s Logic of Existence”. In: *Journal of the History of Philosophy* 58, No. 3, pp. 521-548.
- 石川 求 (1990) : 「クルージウスと若きカント——秘められた離反の構図——」、『思索』、東北大学哲学会編、pp. 23-46。
- 城戸 淳 (2000) : 「カントにおける「窃取」概念の——変容アンチノミー解決への形成過程——」、『哲學』、日本哲学会編、pp. 210-219。
- 手代木 陽 (2013) : 『ドイツ啓蒙主義哲学研究——「蓋然性」概念を中心として——』、ナカニシヤ出版。
- 船木 祝 (2020) : 『カントの思考の漸次的発展——その「仮象性」と「蓋然性」——』、論創社。
- 山本 道雄 (2010) : 『カントとその時代——ドイツ啓蒙思想の一潮流—— (改定増補版)』、晃洋書房。